

萩 浦

集落・祭祀・生産遺構編

前原市文化財調査報告書

第100集

2008

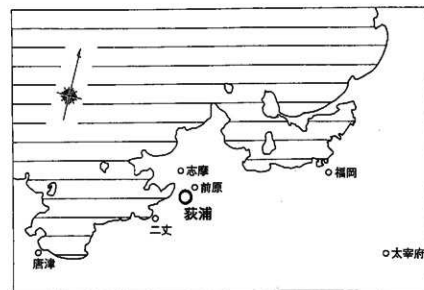
前原市教育委員会

萩 浦

集落・祭祀・生産遺構編

前原市文化財調査報告書

第100集



2008

前原市教育委員会

序

福岡県前原市の萩浦地区で施工された土地区画整理事業では、工事に先立ち平成3年から2カ年にわたり埋蔵文化財の調査を実施しました。砂魚塚古墳群、坂の下古墳群、立石古墳群などでは多くの貴重な遺構、遺物が出土し、当地の埋もれた歴史に光を当てることができました。

このうち、古墳関連の成果については、平成7年に発掘調査報告書を刊行しましたが、それ以外の遺構、遺物について報告書刊行の運びとなりました。

近年、萩浦周辺では、多久道跡群、香力縄原古墳群、上鎌子遺跡など貴重な遺跡の発見が相次いでおり、これらと照らし合わせることによって、当地の歴史のさらなる解明にむけて寄与できるものと期待しております。

この報告書が、当地の歴史文化の解明、文化財保護思想の普及啓発の一助となれば幸いです。

平成20年9月30日

前原市教育委員会
教育長 中原一憲

例言

1. 本書は、平成3年から5年にかけて福岡県前原市美咲が丘、南風（旧大字荻浦、大浦）地区で実施した埋蔵文化財の発掘調査の報告書である。
2. 調査は荻浦土地区画整理組合の委託を受け前原市教育委員会が実施した。本調査報告書作成にかかる平成20年度の組織体制は以下のとおりである。

調査総括 前原市教育委員会 教育長 中原一憲
教育部長 坂巻善直
文化課長 谷口正和
博物館係長 岡部裕俊
博物館係長 岡部裕俊

報告書作成

3. 本書に使用した遺構の実測図は、岡部裕俊、野田純子、瓜生秀文を中心に発掘調査に従事した作業員各位の手により作成・整図された。
4. 遺物図は、岡部、野田の指導のもと川上辰子、高橋久枝、末松伸子、島影弥生が作成したが、A-3地点の火葬臺出土土器について小田富士雄先生（福岡大学名誉教授）下原幸裕氏（福岡県教育委員会）作成の実測図を使用させていただいた。また、製図は岡部、野田、末益真奈美、友池真由美が行った。
5. 本書に掲載した遺構写真は主に岡部、野田が撮影したが、空中写真は（有）空中写真企画（代表壇陸夫）に委託した。また、遺物写真の多くは（有）文化財写真工房（代表岡紀久夫）に委託したが、一部岡部が撮影した。
6. 本書で報告した遺物、写真記録、実測図は伊都国歴史博物館で保管している。
7. 本書の執筆ならびに編集は、平尾和久、江野道和、橋崎直子の協力を得て岡部が行った。

本文目次

I. はじめに	1
1. 調査にいたる経過	1
II. 調査の記録	2
1. A-1地点（市園遺跡）	2
火葬墓	2
打製石斧	2
2. A-3地点（立石遺跡）	4
火葬土坑	4
火葬墓	4
土器群	7
道路状遺構	7
3. B-20-a地点（坂の下祭祀遺跡）	7
概況	7
4. B-21-a地点（坂の下遺跡a地点）	11
掘立柱建物	11
溝	14
その他の遺構	14
5. B-21-b地点（坂の下遺跡b地点）	14
近世水田	14
6. C-6-谷地点（坂の下遺跡c地点）	16
掘立柱建物	16
堅穴住居	18
土坑	18
溝	26
その他の遺構・遺物	27
7. C-6地点（砂魚塚古墳群）	28
火葬墓	28
III. おわりに	28

図版目次

図版1 荻浦地区の航空写真(1973年頃)

- 図版2 a. A-1地点全景(真上から)
b. 火葬墓(西から)
c. 同左(真上から)
d. 火葬墓半截状況
e. 蔵骨器

図版3 a. A-3地点調査前全景(東から)
b. A-3地点火葬土坑、火葬墓等の配置(真上から)

- 図版4 a. 火葬土坑(北から)
b. 火葬土坑(西から)
c. 1号火葬墓
d. 2号火葬墓
e. 1号火葬墓蔵骨器
f. 2号火葬墓蔵骨器
g. A土器群出土甗
h. B土器群出土杯⑧蓋

図版5 a. B-20地点遠景(西から)
b. 頂上部花崗岩露頭近景(真上から)
c. 花崗岩上馬具出土状況と海岸線への眺望(東から)

図版6 a. 馬具出土状況近景(東から)
b. 馬具

図版7 a. 櫛目文鏡
b. 須臾器
c. 白磁

図版8 a. B-21-a地点全景(北東から)
b. B-21-a地点全景(真上から)

図版9 a. B-21-a地点東区近景(上から)
b. B-21-a地点東区近景(北東から)

図版10 a. 掘立柱建物群(真上から)
b. B-21-a地点西区近景(東から)

図版11 a. B-21-b地点調査風景(左は新開池)
b. 水田面地積砂層断面
c. B-21-b地点近世水田全景(真上から)

図版12 C-6-谷地点全景(西から)

図版13 C-6-谷地点全景(真上から)

図版14 a. 奈良時代建物群(真上から)
b. 1号建物(真上から)

図版15 a. 2号建物、1号住居、2号土坑(真上から)
b. 2号住居、3号住居(真上から)

図版16 a. 4号住居のカメラド
b. 土坑群と1号溝(真上から)

図版17 a. 1号土坑
b. 2号土坑
c. 3号土坑
d. 6号土坑
e. 7号土坑
f. 8号土坑

図版18 a. 9号土坑
b. 10号土坑
c. 11号土坑検出状況(北から)
d. 11号土坑上層断面(南から)
e. 11号土坑完掘状況(南から)
f. 砂魚塚1号墳南裾焼土坑(南から)

図版19 a. 12号土坑
b. 12号土坑遺物出土状況(北から)

図版20 a. 12号土坑完掘状況
b. 12号土坑内溝状遺構

図版21 a. 溝群(真上から)
b. 5号溝土層断面
c. 6号溝土層断面
d. 7号溝土層断面
e. 8、9号溝土層断面

図版22 a. 5号住居と3号掘立柱建物(真上から)
b. 柱穴53土師皿出土状況
c. 柱穴57土師皿出土状況
d. 大柱穴輸出状況
e. 大柱穴半截状況

図版23 a. C-6地点砂魚塚1号墳南裾出土蔵骨器
b. A-1地点市園遺跡出土打製石斧

挿 図 目 次

第1図	区画整理事業地の範囲と調査地点位置図	1
第2図	A-1地点の地形と火葬墓、出土遺物実測図	3
第3図	A-3地点の地形と遺構配置図	5
第4図	火葬土坑、火葬墓、出土土器実測図	6
第5図	A-20-a地点の地形測量図	8
第6図	馬具の出土状況と出土馬具実測図	9
第7図	A-20-a地点出土銅鏡、土器実測図	10
第8図	B-21-a地点遺構配置図	12
第9図	B-21-a地点独立柱建物実測図	13
第10図	B-21-b地点近世水田埋没土層図	14
第11図	B-21-b近世水田遺構配置図	15
第12図	C-6-谷地点遺構配置図	17
第13図	C-6-谷地点1号建物実測図	19
第14図	C-6-谷地点独立柱2号建物、4号住居実測図	21
第15図	C-6-谷地点2, 3, 4号住居実測図	22
第16図	C-6-谷地点1, 2, 3, 6号土坑実測図	23
第17図	C-6-谷地点7, 8, 9, 11, 12号土坑実測図	24
第18図	C-6-谷地点溝群実測図	25
第19図	C-6-谷地点溝土層断面図	26
第20図	C-6-谷地点大柱出土状況実測図	27
第21図	C-6地点出土蔵竹器実測図	28

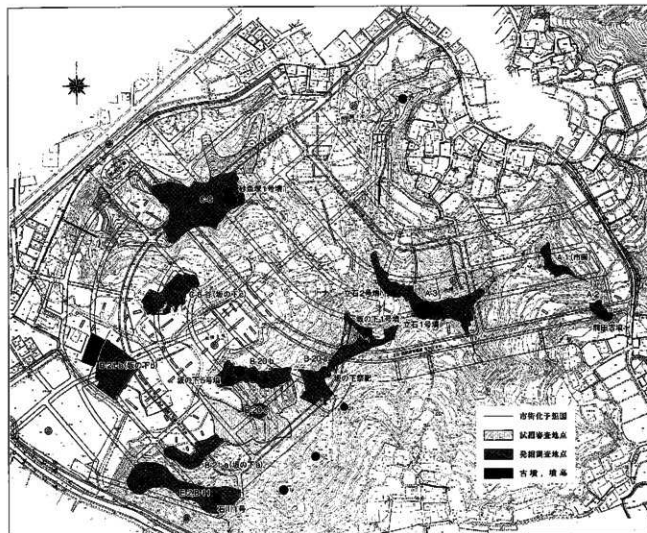
I. はじめに

1. 調査にいたる経過

荻浦地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、同区画整理組合（重富宣明会長）からの委託を受け、平成3年10月から平成5年9月にかけて実施した。同時に資料の整理、報告書の作成準備にとりかかり、平成6年度末には古墳時代の遺構、遺物について報告書を刊行し調査にかかる記録類、出土資料等は伊都国歴史博物館で保管している。本報告書では、古墳編ではとり扱うことができなかった遺構、遺物についての調査成果を補完的に報告することとした。

なお、調査工程の詳細、各調査地点の範囲等については、荻浦-古墳編-（1995年刊 前原市文化財報告書 第58集）を参照いただきたい。

また、本調査報告書作成にかかる組織体制は、例言中に記載している。



第1図 区画整理事業地の範囲と調査地点位置図 (1/5,000)

II. 調査の記録

1. A-1地点 (市園遺跡)

概況 (図版2-a, 第2図①)

A-1地点は、区画整理事業地の東端部に位置する。最高所は標高58mを測り、東は谷を隔てて、住宅都市整備公園(当時)により区画整理が進められた大浦地区に接する。また、西は尾根の鞍部を経由して荻浦地区で最も標高の高いA-3地点に連なる。

南側は丘陵裾にある大浦集落に向かって急勾配の斜面となっているが、南向きの地形を利用して、畑の開墾が行われており段々畑となっていた。表土から寛永通宝が出土しており、開墾が江戸時代までさかのぼるものとみられる。

南斜面は重機で遺構検出を行った。裾部には6世紀後半築造の大浦前田古墳が立地する。

北斜面は、尾根線を中心に人力で表土の除去と遺構検出を行った。最高所から北に25mほどの地点で表土直下から奈良時代の火葬墓1基が出土した。

また、火葬墓から6mほどの標高54.5mの北西斜面から縄文時代の打製石斧が1点出土している。

火葬墓 (図版2-b, c, d, 第2図②)

尾根頂上から北寄りの地点で、平面プランは円形で、直径55cm、深さ29cmの断面逆台形の土坑を掘り蔵骨器を埋納する。蔵骨器の本体は、長頸壺、蓋は杯蓋を転用している。

蔵骨器内には焼けた骨片が細かく砕いて納められていた。骨は上から順次とりだして観察してみたが部位ごとに納めるなどの規則性は認められず、無秩序に詰め込まれていた。

蔵骨器 (図版2-e, 第2図③)

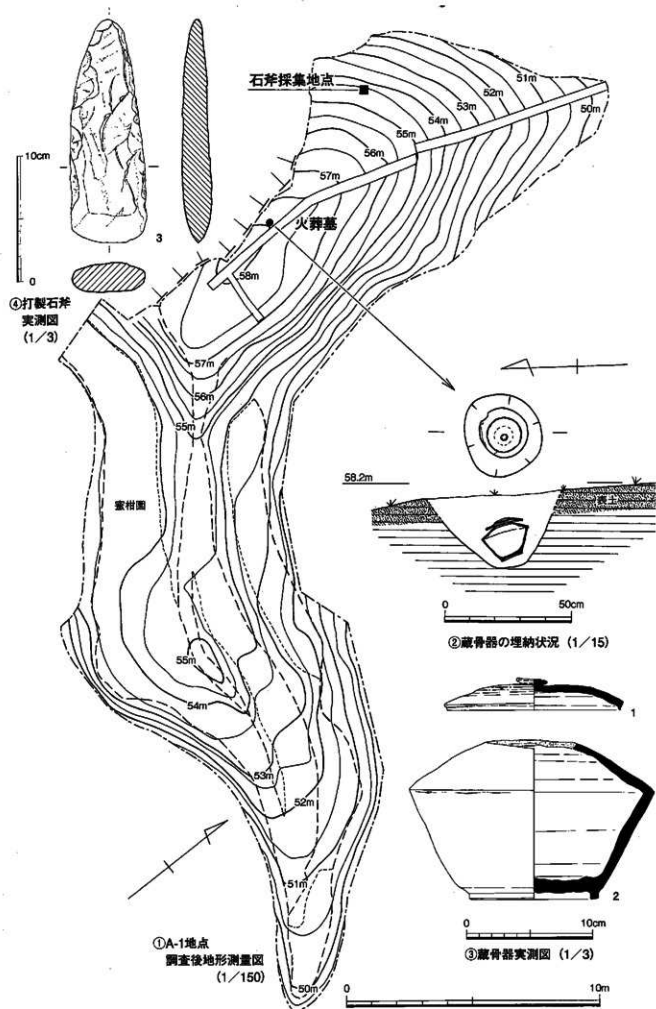
蓋は杯蓋を用いている。天井部に扁平のつまみをつけ、天井部は平端で口縁端部は下方につまみあげておさめる。外面天井部はヘラケズリ、他はヨコナデ、ナデで仕上げる。高さ2.5cm、口縁径14.2cmを測る。青灰色を呈し焼成は堅緻である。

本体は胴部最大径に明瞭な肩を有する高台付き長頸壺を転用し、口頸部を打ち欠いて使用する。現口縁部の内径は現状で6.0cm、残存高12.8cm。胴部最大径19.5cm。底径10.4cmを測る。青灰色を呈し焼成は堅緻である。

打製石斧 (図版2-f, 第2図④)

北斜面の表土中から鉛刃の打製石斧が完形で出土した。安山岩製で、全長は17.8cm、幅6.0cm、厚さ2.4cmを測り、やや薄いつくりである。握り部全体に粗い打裂による剥離調整痕が残る。刃部は両面からの研磨により仕上げる。

縄文時代の資料である。近隣では縄文時代の集落遺構は確認されていないが、県の文化財地図には北側の現荻浦集落で石斧が採集されたことが記載されており、この凹地帯に集落が営まれていた可能性がある。



第2図 A-1地点の地形と火葬墓、出土遺物実測図 (1/150, 1/3)

2. A-3地点(立石遺跡)

概況(図版3、第3図)

区画整理事業地内の最高所に位置し標高は70mを測る。調査地点は東西方向に稜線が伸びる東西70m、南北20mほどのなだらかな平坦面となっていて、西部には立石1号墳(前方後円墳・前期)が築かれていた。

調査区の南東部から火葬土坑、火葬墓などの奈良時代の墳墓群が出土したことから、調査範囲を南に拡大したが、遺構は確認できなかった。

火葬土坑(図版4-a、b、第4図①)

調査地点の南東部、南向きの緩斜面が急斜面へと変わる境界付近で検出した土坑で、丘陵を南北方向に弧状に横断する道路遺構を切って掘りこまれていた。

土坑は南北方向に主軸をとる不正楕円形状の平面プランを呈する。南北長1.17m、東西幅1.03m、深さ0.24mの浅い土坑で、東側に向かって深身を増し、その北、西、東の三方に花崗岩の角礫を据えていた。角礫の表面は火を受けて焼け、周囲に小片化した骨片が多く出土したことから火葬土坑と考える。花崗岩の角礫は棺を固定し、火の回りをよくするために置かれた台石であろう。

土坑の周壁は火を受け赤変硬化が認められたが、表面のみにとどまり、炭、骨片の埋土も単層であることから、極めて短期間の使用にとどまったものと考えられる。

また、出土した骨は小片のみで、多くは南端に寄せ集められた状況が認められることから、集骨し、別所に埋葬されたと考えられる。

埋土内からは、時期の特定につながる資料の出土はないが、周囲から奈良時代の火葬墓、土器群が出土していることから、当該時期の火葬土坑である可能性が高い。

火葬墓

1号火葬墓(図版4-c、第4図②)

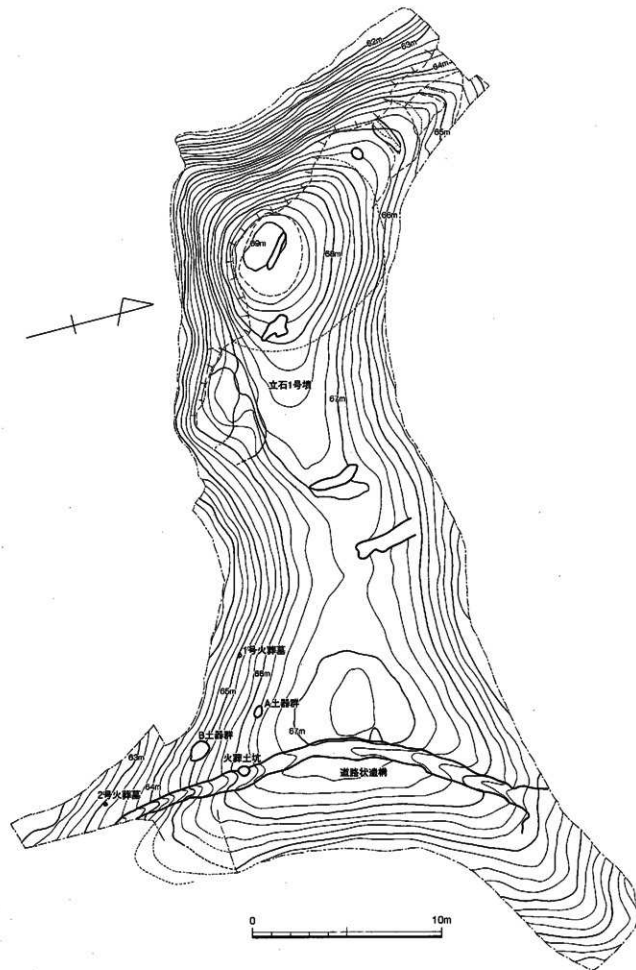
火葬土坑の西12m地点で出土した火葬墓である。南向きの緩斜面に径40×36cm、深さ19cmの円形小土坑を掘り、大型の杯身に納骨していた。骨は細かく砕かれ口縁部近くまで詰めて納められていた。

鹿骨器(図版4-d、第4図③) 大型の杯・蓋を用いている。蓋は口縁径21.4cm、高さ2.8cmを測る。天井部には擬宝珠つまみをつけ、口縁端部は下がり気味に丸くおさめる。天井部外面はヘラケズリ、他は、ヨコナデ、ナデで仕上げる。

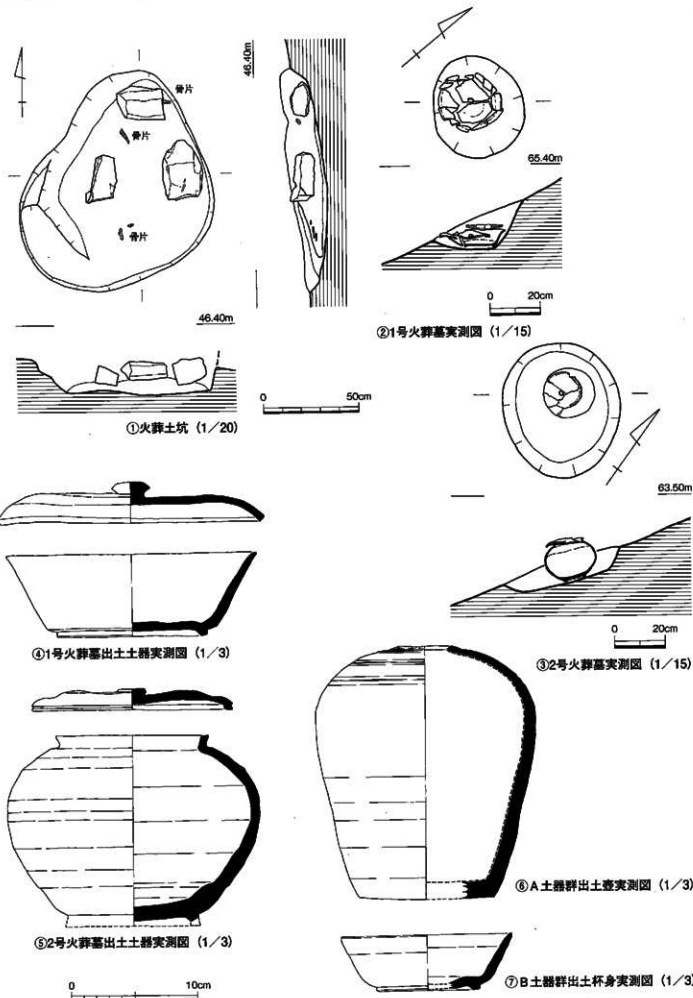
本体に用いられた杯は、口縁径19.5cm、底径13.5cm、器高6.5cmを測る。低い高台は若干外に張り出す程度で、体部は直線的に口縁部に向かって開きながら伸びる。外面底部は回転ヘラケズリ、他はヨコナデ、ナデで仕上げる。

2号火葬墓(図版4-d、第4図③)

火葬土坑の南14mで出土した。A-3地点の東端から南に派生する尾根鞍部の西斜面に位置する。径57×47cm、深さ20cmの円形小土坑を掘り、その東寄りに鹿骨器を納めていた。土坑の底面は西に傾斜しており、鹿骨器も南に傾いた不安定な状態で出土した。



第3図 A-3地点の地形と遺構配置図(1/200)



第4図 火葬土坑、火葬墓、出土土器実測図 (1/20, 1/15, 1/3)

蔵骨器には、口縁付近まで細かく砕かれた骨が詰まっていた。

蔵骨器 (図版4-f、第4図⑤) 短頸壺、杯蓋を用いる。蓋は口縁径15.9cm、高さ1.8cmを測り、天井部には扁平なつまみをつけている。口縁部は下向きに「コ」の字状に仕上げる。

短頸壺は、器高15.3cm、口縁径12.0cm、胴部最大径20.1cm、底径12.0cmを測る。口唇部は「コ」の字形に成形し少し開き気味に短く立ち上がる。胴部は若干肩が張りぎみの球形を呈し、底部には低く外に張り出した高台がつく。

土器群 (図版4-g, h、第4図⑥、⑦、⑧)

火葬土坑の南側斜面の2か所で土器片が散乱した状態で出土した。付近は人力で表土剥ぎを行ったので、調査時に破損したのではない。土器の周辺では顕著な遺構は確認できなかったが、1、2号火葬墓はともに埋置された深さが極めて浅く、これらも、表土の流失などにより火葬墓が地表面に露出して破損、散乱したものと考えられる。6は土器群A、7、8は土器群Bからの出土。

出土土器

6は、長頸壺である。胴部のみが残存していた。口頸部が出土していないのは打ち欠きが行われていたのかもしれない。残存高20.4cm、胴部最大径18.4cm、底部径10.8cmを測る。底部はヘラケズリにより平坦面をなし、胴下半部直線的に外に開くが胴部分から丸く内湾し頸部にいたる。肩部からくびれ部下にかけて3条のヘラ描き沈線がめぐる。

7は、杯身である。復元口縁径13.5cm、器高4.2cmを測る。底部の高台は低く小さい。8は、杯蓋で口縁径14.0cm。焼けひずみが著しい。蔵骨器に使用された可能性もある。

道路状遺構 (第2図)

火葬土坑に切られた幅1.2~2.3mほどの浅いU字形にくぼんだ溝状遺構を検出した。黒色土が埋土で、火葬土坑に切られている。南北方向に尾根を縦断するように配されていることから古道と考えられ、古墳群、火葬土坑、火葬墓群との関係が想定できる。

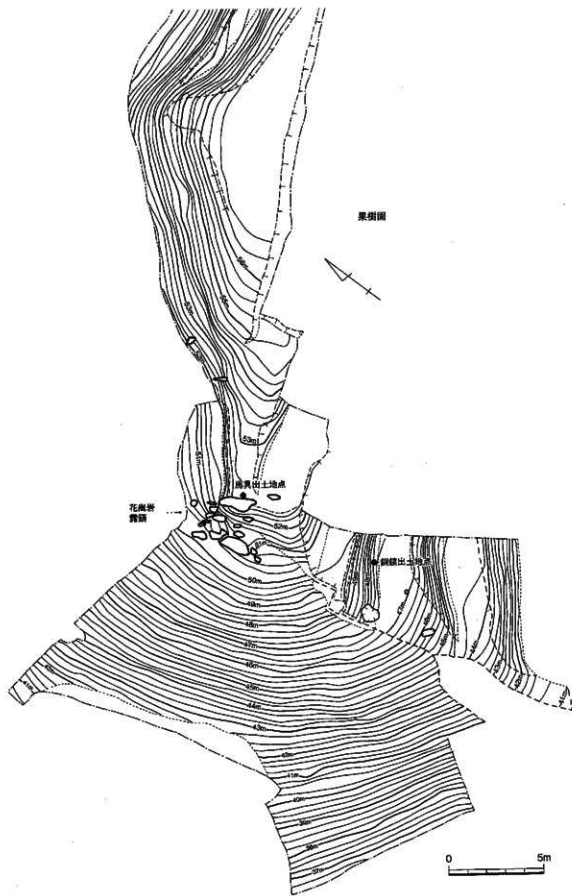
3. B-20-a 地点 (坂の下祭祀遺跡)

概況 (図版5-a、第5図)

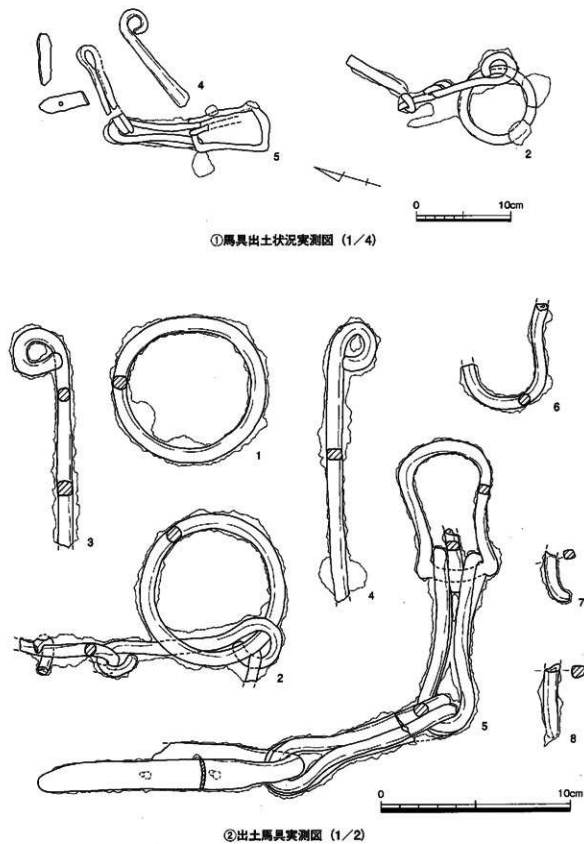
A-3 地点から南西方向に派生した尾根は中途で馬蹄形に分岐してさらに西に伸び、先端部には古墳群 (坂の下古墳群、石川古墳群) が築かれている。この尾根の分岐地点 (標高53m) に花崗岩の露頭があった。露頭では大小の花崗岩塊が東西8m、南北9mほどの範囲で表出していたが、これらが横穴式石室の石材である可能性があったことから周辺を清掃し、これらはすべて自然露頭であることを確認した。地元の古老によれば戦前には建設資材として切り出され、民家の石垣などに利用されたといい、その名残は岩肌に残ったクサビの痕跡で確認できた。

ところが、最高所にあたる花崗岩上に貼りつくように金具、骨金具が出土した (図版5-c、6-a、第6図)。金具は花崗岩に鑲着し、原位置を大きく変えることなく出土したとみられる。

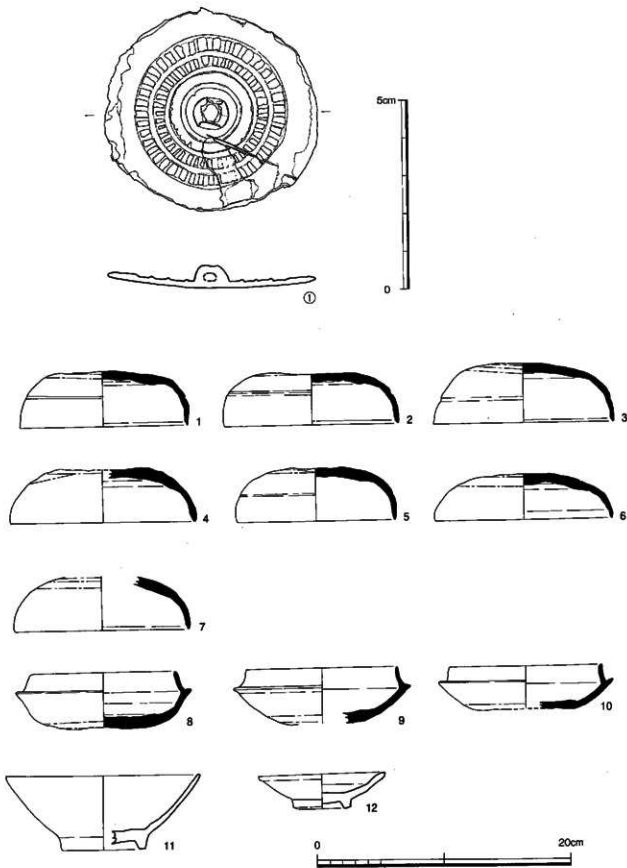
また、この花崗岩の東、北側の岩の隙間からは須臾器や白磁片が出土した。



第5図 A-20-a地点の地形測量図 (1/200)



第6図 馬具の出土状況と出土馬具実測図 (1/10, 1/3)



第7図 A-20-a地点出土銅鏡、土器実測図(1/1, 1/3)

さらに、馬具出土地点から15mほど南に下がった段々畑の表土から櫛目文鏡が採集された。これらは露頭から滑落した可能性がある。

白磁碗、小皿については、この露頭の斜面西裾で横穴式石室(坂の下5号墳)を再利用した鎌倉時代の炭窯、掘立柱建物などを確認したことから、これに関連する資料と考えることができる。しかし、馬具、須恵器、銅鏡は他の目的のもとに花崗岩の露頭周辺に持ち込まれたものと考えられる。

露頭は尾根の先端に位置し、ここから西には旧多久川の河口、さらに古加布里海(現在の船越海)を見ろすことができる好位置にある。また、西裾には5世紀~7世紀にかけて継続して営まれた坂の下古墳群や古墳時代の集落も立地することから、これらの造墓に関わる集団による祭祀場であった可能性があり、特に坂の下祭祀遺跡と呼ぶこととした。祭祀の時期は6世紀後半代であろう。

櫛目文鏡(図版7-a、第7図①) 外区の素文帯がほとんど欠落している。内区は鈕を中心に三条の圏線がめぐり二条目の圏線から外に向かって放射状に38本の櫛目文が配される。櫛目文は最初は鈕を起点として内区全体に割り付け、一条めと二条めの間は途中でかき消されたことがわかる。面径は5.6cmほどである。

馬具(図版6-b、第6図②) 1, 2は素環鏡板付轡金具である。鏡板1は現径7.8~8.1cm、2は7.7~8.0cmを測る。銜、引手金具はいずれも轡金具の先端を丸く曲げて繋ぐ簡素なつくりである。銜は中央に短い金具を加えた3連式であろう。

3, 4は轡金具に連なる引手金具と考えられる。5は鍔金具で、先端に鉤具が付き、2連の大きな兵庫鎖を介して鍔の留金具につながる。6, 7, 8は鉤具の破片であろうか。

須恵器(図版7-b、第7図1~10) 図示したのはすべて杯身、壺である。杯蓋は、天井部との境に線を残し、口縁径の大きい1~3, 5, 後が消失する4, 6, 7があり、壺式に幅が認められる。

白磁(図版7-c、第7図11, 12) 11は、碗で口縁径15.2cm、器高5.7cmを計る。見込みは蛇目軸刺ぎを行い、圏線がめぐる。12は、小皿で口縁径10.0cm、高さ2.6cmを測る。

4. B-21-a地点(坂の下遺跡a地点)

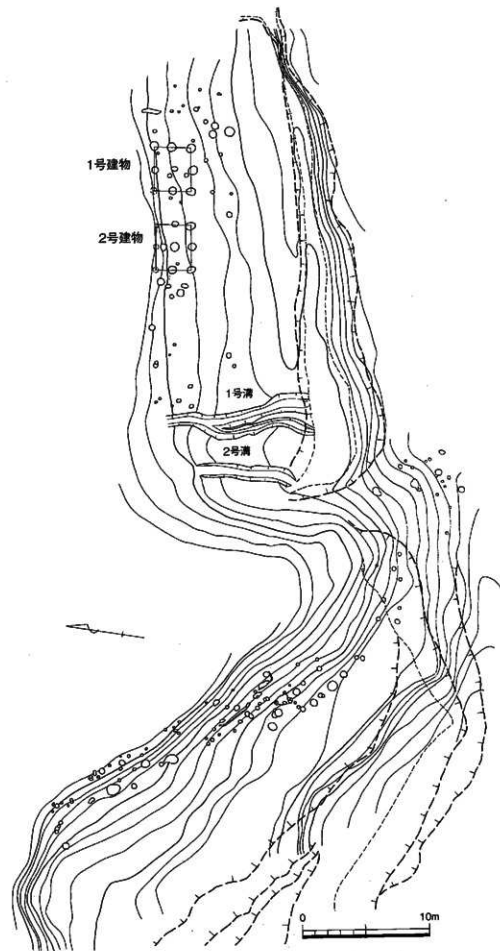
概況(図版8-b、第8図)

調査地点は、B-20-a地点から南西に派生した丘陵の北裾にあたる。標高5~7mほどの緩斜面で掘立柱建物、柱穴、溝などの遺構を検出した。西側調査区では遺構は急峻な斜面に貼りつくように残っていて、中には、堅穴住居の壁の一部とみられる小テラス面もみられることから、当初はならかな緩斜面が北に向かって延び、その上に集落が展開していたものと考えられるが、何らかの要因で意図的に大きく削り取られ、現況を呈すにいたったのであろう。

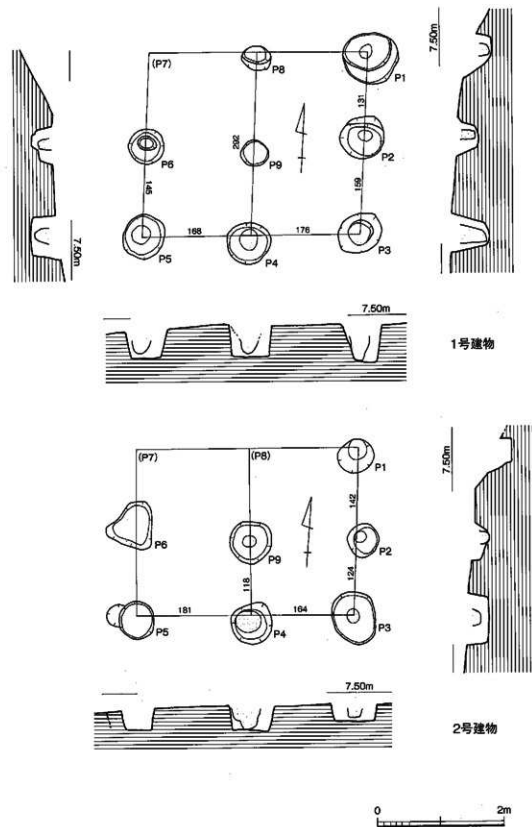
調査地点の北には江戸時代以降に新たに開墾された水田が広がっていて、これらの新田開発に伴う採土場となった可能性もある。

掘立柱建物

調査地点の東端で検出した2間×2間の総柱建物で、2棟が東西方向に主軸を向け、一列に並んで建つ。埋土からは遺構の時期の推定できるような遺物は乏しいが、奈良時代の建物と推定される。



第8图 B-21-a 地点遺構配置图 (1/300)



第9图 B-21-a 地点掘立柱建物实测图 (1/60)

1号独立柱建物 (図版10-a、第9図①)

N87°Eに主軸を向け、奥行2.90m、桁行3.44mを測る。柱の掘り方はいずれも円形で、径は20cmほどを測る。

2号独立柱建物 (図版10-a、第9図②)

N85°Eに主軸を向け、奥行2.66m、桁行3.45mを測る。柱の掘り方はいずれも円形で、径は20cmほどを測る。

溝 (図版8-b、第8図)

独立柱建物群の西11mに、丘陵から窪地に向かって3条の溝が掘られている。

いずれも、断面U字形を呈する。背後の丘陵裾には湧水層がみられ、これらの排水を目的として掘られたものと推定される。

その他の遺構

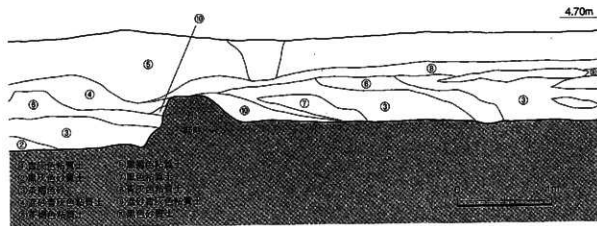
調査区の西側では、斜面に貼りつくように大小の柱穴を検出した。建物としてまとまるものはないが、斜面には、竪穴住居の一部とみられる小テラスがみられ、運土からは古墳時代前期～中期の土師器片が出土している。当該期の竪穴住居であった可能性が高い。

5. B-21-b地点 (坂の下遺跡b地点)

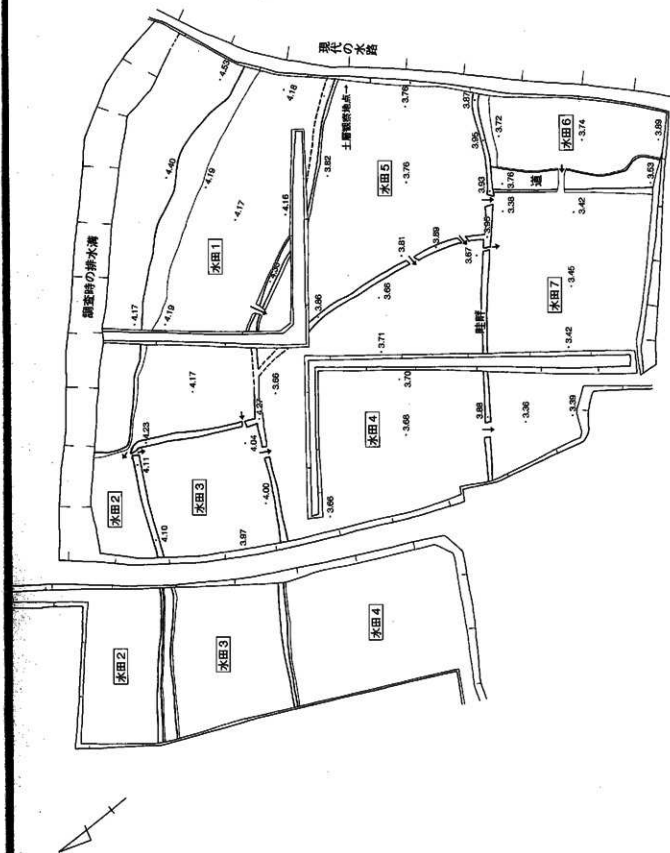
近世水田 (図版11、第10、11図)

新開池の東側で、現水田の地下に厚い粗砂の堆積層を検出した。粗砂は乳白色、褐色砂が細砂、シルト層との互層をなして堆積しており (第10図、図版11-b)、西側から東側に向かって大規模な洪水により短時間のうちに堆積したことがわかる。

調査地点の西を流れる多久川は果菅二級河川で、普段の水量は少ないが、多久川流域の上流ではならぬかな丘陵地が川の両岸に広がり、上流に降った天気が最終的にすべてこの川に集まってくる。昔から集中豪雨のたびに上流の丘陵地帯の雨水が流れ込み、下流一帯に洪水を引き起こした。



第10図 B-21-b地点近世水田埋没土層図 (1/40)



第11図 B-21-b近世水田遺構配置図 (1/400)

粗砂層中からは、弥生時代前期後半の土器や奈良時代の須恵器とともに少量ながら近世陶磁器が出土しており、堆積は江戸時代以降である。

粗砂層下面から水田遺構を良好な状態で検出した。調査区で確認できた水田は計8枚。一部消失しているものの、盛土による畦畔によって区画され、各水田区画には取水、排水の水口を確認することができた。水は水田1から順次供給されていたことがわかる。

水田5と8を画する畦は幅が1.5mほどあり、畦と道路を兼ねて使用されたものと推定される。

水田面には足の指がわかるほどの輪郭のシャープな無数の足跡が残されていた。洪水は農作業が頻繁に行われた夏季に襲ってきたのではなかろうか。

この水田群の北、南、西とも標高は遺構面よりも低く、西側の多久川流域から水を取水することは不可能で、おそらく東側の萩浦丘陵の中腹に天水をたくわえた貯池を設け、農業用水を確保したものと推定される。調査地点の西にある新開池は文化14(1814)年の築堤とされているが、池の用水は多久川より引くため、貯水面の高さは水田遺構よりかなり低く、この池を利用した水の供給は難しいことから、水田の閉塞は新開池よりも古い時期のものと考えられる。この水田を潤した用水は坂の下地区の東奥に残されていた貯池であったのかもしれない。

調査地点の西には上新開、その北側は中新開、下新開の小字が残っているが、前原から萩浦にかけての一带が干拓されたのは元禄十五(1702)年とされる。しかし、調査地点の小字は「新開」地には含まれていない。今回調査した水田はこれをさかのぼる可能性もある。

6. C-6-谷地点(坂の下遺跡c地点)

概況(図版12, 13, 第12図)

調査地点は事業地の北西端に位置し、砂魚塚1号墳が築かれた丘陵の南西斜面の裾、多久川の旧河口に向かって開く標高10-24mの緩斜面である。掘立柱建物が確認されたB-21-a地点とは谷地を介して南に対峙する位置にある。

遺構は丘陵頂部から派生した2本の尾根に挟まれた小さな沢筋の斜面に分布する。建物は主に調査区西側の沢筋の緩斜面に沿って東西に並んで分布し、製鉄に関連する遺構は南尾根の斜面を中心に分布している。

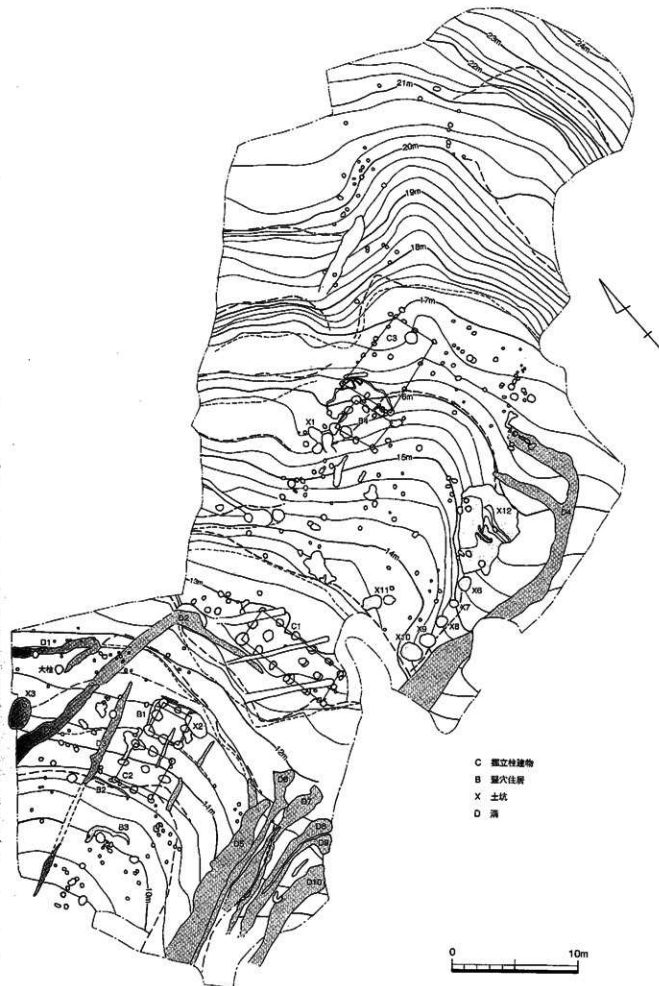
掘立柱建物(図版14-a)

奈良時代の掘立柱建物2棟、中世の建物1棟を確認している。

1号建物(図版14-b, 第13図)

緩斜面の中ほどの標高12-13mに、等高線に沿って15×9mの範囲にテラス面を造成して建てられた2間×5間の総柱の建物である。主軸はN13°Wにとる。桁行8.23m、梁行2.85mを測る。柱穴は円形で径17-19cmほど。柱間は桁行で1.46-1.85mを測る。柱の抜き取りが行われたものが多い。

建物の北西部、柱穴11の西から北に向かって排水溝が掘られていた。溝は、一度は北流し、下方の建物群を迂回してからN90°W方向に向かって直線的に伸びていることから、下方の建物群と同時期に建てたものと推定される。時期は奈良時代であろう。



第12図 C-6-谷地点遺構配置図(1/300)

2号建物 (図版15-a, 第14図)

1号建物の西側に位置し、1号住居と一列に並んで建つ2間×2間の総柱の建物である。桁行き2.33m、梁行2.15mを測る。主軸はN10°Wにとる。

奈良時代の建物である。

3号建物 (図版22-a, 第14図)

調査区東端の斜面中ほどに位置する2間×3間の建物で桁行6.60m、梁行3.60mを確認できた。周辺の柱穴S3.57から土師皿が出土しており、中世の遺構と推定される。主軸はN79°Eにとる。

竪穴住居

1号住居 (図版15-a, 第13図)

2号建物の上手東側に位置する方形プランと推定される住居で周壁が一部残る。主軸はN69°Eにとる。屋内に8本の柱を配する。柱痕跡から柱は直径16~20cmほどの丸太材を用いていたものと推定される。壁際の南側床面の一部が径30cmほどの範囲で赤変していた。

2号住居 (図版15-b, 第13図)

2号建物の西に隣接して検出した。東壁はN21°W方向に面を向けている。南北3.3mにわたって掘りこんだテラス状の造成面で住居の一部と推定したが、柱穴、カマドなどは検出できなかった。

3号住居 (図版15-b, 第13図)

2号住居の西3mで検出した「コ」の字状にめぐる周溝状の遺構である。竪穴住居の周溝の一部と推定したが、柱穴、カマド等は確認できなかった。溝は幅25~50cm、深さ5cmを測る。

4号住居 (図版16-a, 第14図)

1号建物の東20mに位置する住居である。主軸方位はN68°E方向にとる。住居の周壁は北西部のみで確認されたにとどまる。

北西のコーナーでは、作りつけのカマドを検出した。奥行き90cm、幅130cmを測り、上面は削平を受け残り具合はよくないが、赤黄色粘土で全体を築き、焚口と燃焼部の位置は確認することができた。カマドの西側には長さ187cmの雨水除けの溝も付設されている。

土坑 (図版16-b)

1号土坑 (図版17-a, 第16図①)

長さ1.49m、幅0.76m、深さ0.14mの不整形土坑である。埋土内から多くの小礫が出土した。

2号土坑 (図版17-b, 第16図②)

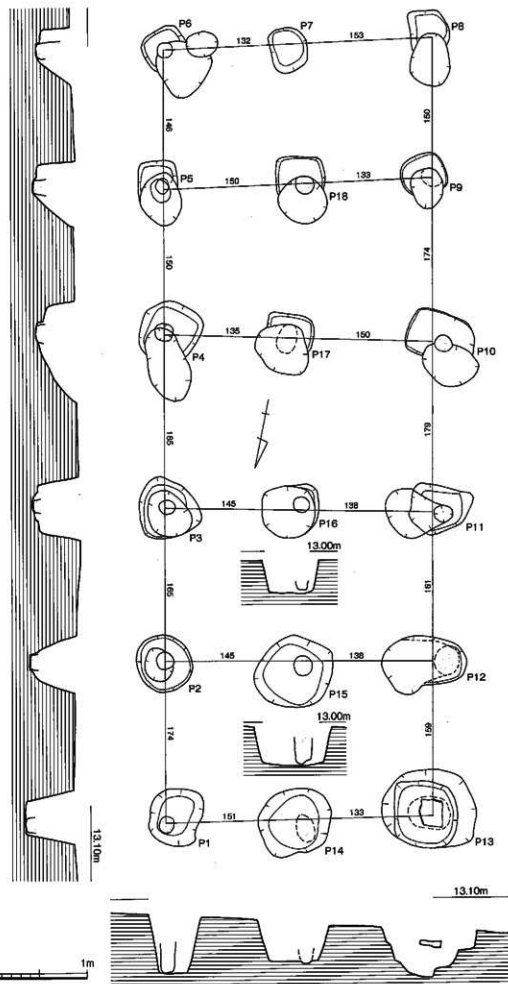
1号住居を切って掘られた長さ2.23m、幅1.36m、深さ0.55mの楕円形プランの土坑である。埋土の上層からは拳~人頭大の礫が、下層からは焼けた角柱状の石が出土している。埋土中からは、弥生後期の粟稻片、須恵器、青磁碗、漆器碗が出土した。中世の遺構である。

3号土坑 (図版17-c, 第16図③)

調査区の北西部で検出した楕円形プランの土坑で、長さ2.31m、幅1.62m、深さ0.27mを測る。埋土からは角礫が多く出土している。

6号土坑 (図版17-d, 第17図④)

南尾根斜面で横一線に並んだ土坑群のひとつで最も東に位置する。不正隅丸方形の土坑で長さ



第13図 C-6-谷地点1号建物実測図 (1/60)

1.13m、幅0.87cmほど、深さは0.51mを測る。埋土からは炭、焼土が多く出土した。

7号土坑 (図版17-e, 第17図①)

不整形プランの土坑で、長さ0.63m、幅0.54m、深さは0.28mを測る。埋土からは炭、焼土が多く出土した。

8号土坑 (図版17-f, 第17図②)

不整形プランの土坑で、長さ1.05m、幅0.79m、幅0.24mを測る。埋土からは炭、焼土が多く出土した。

9号土坑 (図版18-a, 第17図③)

長楕円形プランの土坑で、長さは1.02m、幅0.75m、深さは0.06mと浅い。埋土には炭が堆積し、床面は赤変硬化していた。

10号土坑 (図版18-b, 第12図)

3m四方の範囲に焼土、炭が広がる薄い土坑である。

11号土坑 (図版18-c, 第17図④)

10号土坑の北4mに位置する平面が不正双円形を呈する土坑であるが、東部の環状の赤変硬化部を有する円形土坑と西側の不整形土坑が切り合っていることがわかる。主軸をN70°Wにとり、長さ1.17m、幅0.74m、深さ0.17mを測る。遺構の東側で0.37×0.41mの範囲に幅5~9cm、深さ6cmの環状に赤変硬化した箇所が確認された。赤変部位には断続的に途切れた部位が認められた。この部位の下層の土層を観察すると、赤変部位のさらに外側にも内側に赤変硬化層が確認された。西側土坑の下層から斜格子文の平瓦が出土しており、奈良時代後半期と推定される。

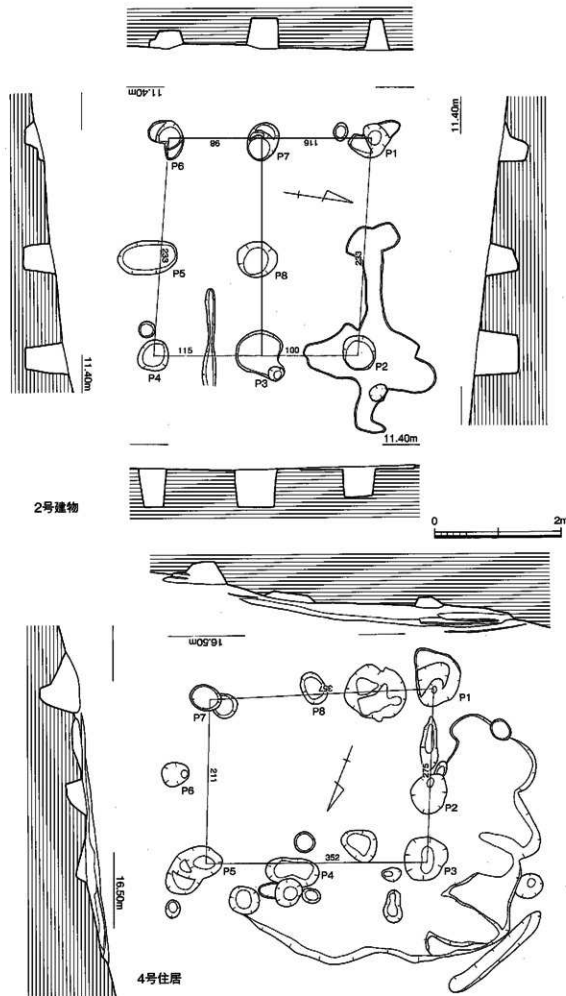
12号土坑 (図版, 第17図⑤)

6号土坑の東側斜面に位置する、長さ5.4m、幅3.7m、深さ0.45mの範囲に掘りくぼめられた不整形の土坑である。

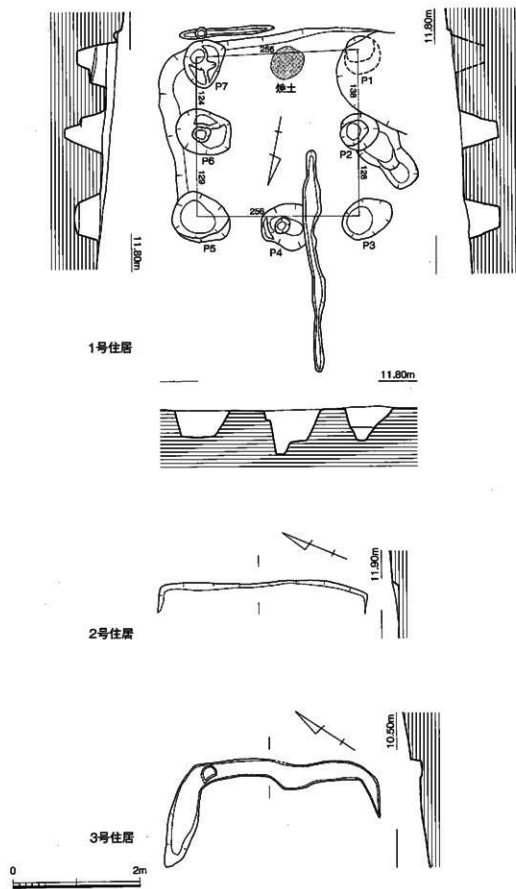
南壁面は斜めに傾斜し、中央部では土坑を南北に掘った大小2条の溝(小溝1, 小溝2)が掘られ、いずれも溝下端では「ハ」の字状に広がり、周囲の壁面は熱を受けて赤変硬化していた。床面は方形に区画した掘り方が残る。

土坑内部からは焼土、炭、鉄滓が出土したが、小溝1中からはふいご羽口、鉄滓、焼石が集中して出土している(図版19-b)。

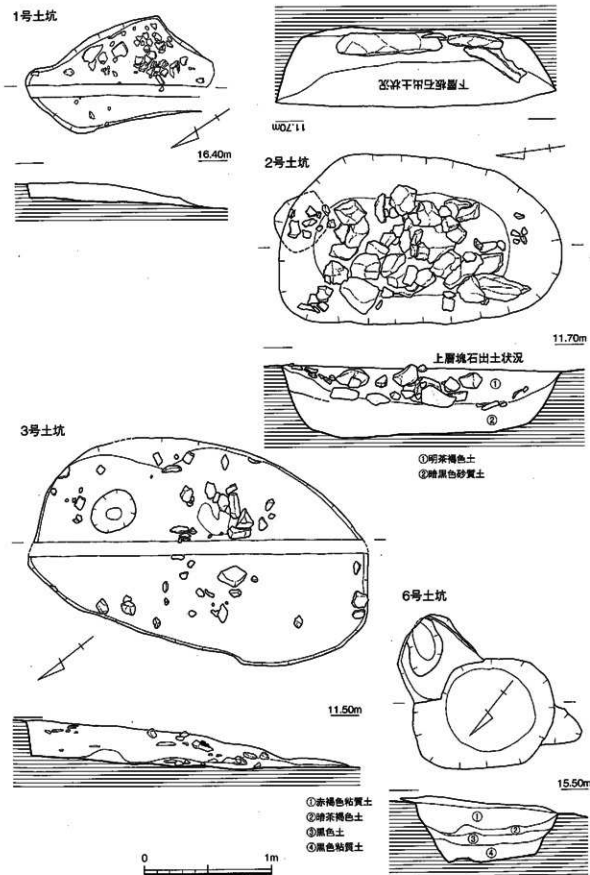
なお、調査中に4~6号土坑としたものは、一括して12号土坑としたので、本報告においては、欠番扱いとする。



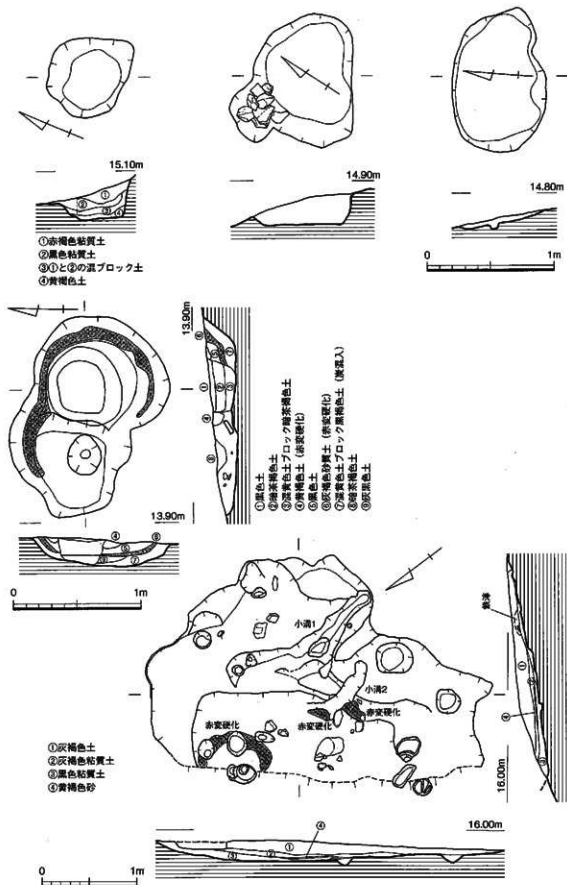
第14図 C-6-谷地点2号建物、4号住居実測図 (1/60)



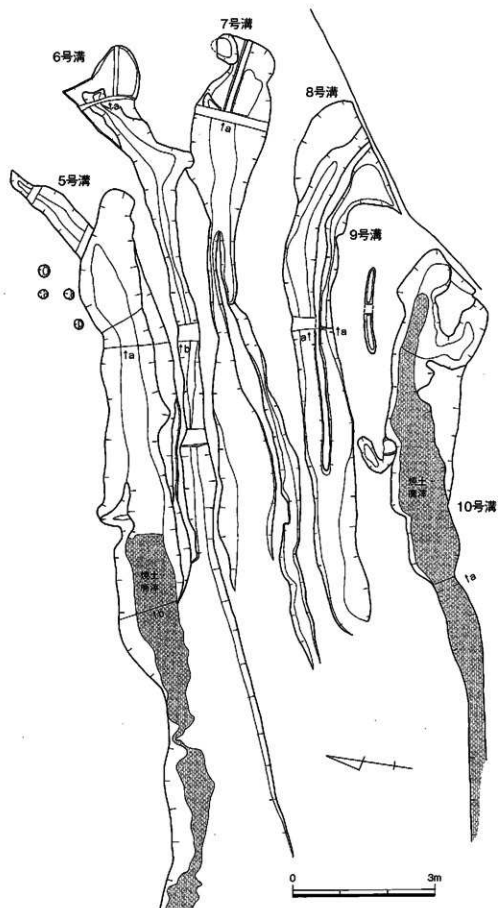
第15图 C-6-谷地点2, 3, 4号住居实测图 (1/60)



第16图 C-6-谷地点1, 2, 3, 6号土坑实测图 (1/30)



第17図 C-6-谷地点7, 8, 9, 11, 12号土坑実測図 (1/30, 1/40)



第18図 C-6-谷地点溝群実測図 (1/80)

溝

1号溝 (図版21、第18、19図)

調査区の北西隅で検出したV字に展開する小溝である。用途は不明。

2号溝 (図版21、第18、19図)

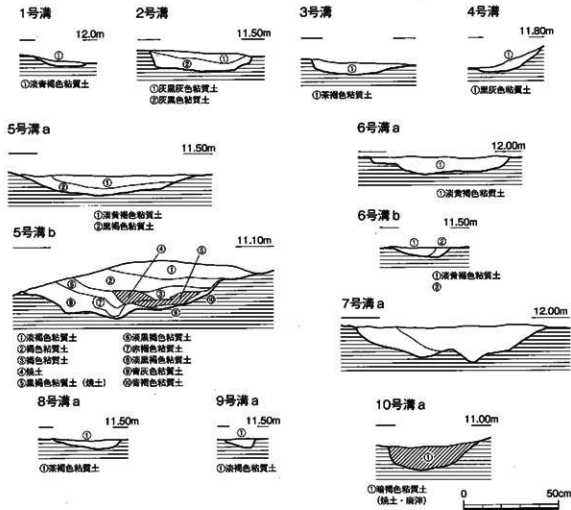
1号建物に伴う排水溝である。詳細は1号建物で報告済みである。

3号溝 (図版21、第18、19図)

2号建物、1号、3号住居に平行してのびる小溝である。

4号溝 (図版21、第18、19図)

12号土坑の東から6~12号土坑を囲むように南に迂回しながら巡る溝で、東区では2条の小溝に分岐している。土坑周囲の鍛冶場の排水機能を高めるために配されたものと推定される。



第19図 C-6-各地点溝土層断面図 (1/20)

5号溝 (図版21、第18、19図)

溝群の北端で検出した溝で鍛冶の廃滓溝である。断面は浅いU字形を呈し、幅2mほどで、東端は広く深くなっている。溝の西下流から多くの焼土が出土した。埋土から土師器片が出土している。

6号溝 (図版21、第18、19図)

5号溝の南に平行してのびる幅 mほどの小溝で中ほどで4号と合流する。鍛冶の廃滓溝である。

7号溝 (図版21、第18、19図)

6号溝の南に位置する溝で、東端の土坑状の広く深い地点から西にのび、直後に二股に分かれ、浅くなり消える。鍛冶の廃滓溝である。

8、9号溝 (図版21、第18、19図)

10号溝の北に位置する溝で、東端は深く広くなっていて、2条の溝が切りあったものである。西側ののびている。鍛冶の廃滓溝である。

10号溝 (図版21、第18、19図)

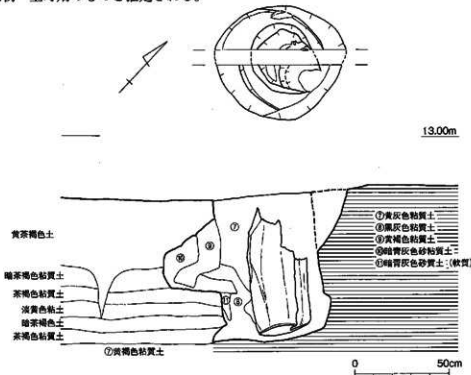
溝群の南端で検出した溝で、東に向かって深くなる。東端はさらに調査区外に続いている。埋土から焼土、炭、鉄滓が多く出土した。廃滓溝と推定される。

その他の遺構・遺物

大柱 (図版22-c~e、第20図)

調査地点の北東部で直径0.9mの円形土坑から丸木の本柱が出土した。土坑の深さは1.54mで、その中央に本柱が直立していた。本柱は径62cmのクスノキの丸木で、樹皮を残し、底面には手斧による加工痕跡が明瞭に残る。埋土には時期を示す遺物は発見されなかった。

樹表皮を切り出し放射性炭素による年代測定を行ったところ、 610 ± 80 yearsBPとの測定結果が出た。南北朝~宝町期のものと推定される。



第20図 C-6-各地点大柱出土状況実測図 (1/40)

7. C-6地点(砂魚塚古墳群)

火葬墓

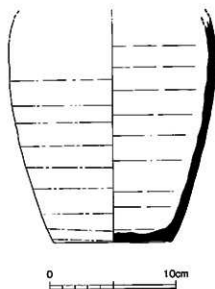
砂魚塚1号墳裾の南斜面でバックホーを用いて表土剥ぎを行った際に、須恵器の長頸壺を用いた蔵骨器を納めた火葬墓が発見された。表土直下から出土したため、造構は削られ出土状況の詳細を確認することはできなかった。

出土地点の西側では、炭が堆積した焼土坑を検出したが(図版18-f)、火葬土坑であるの可能性がある。

蔵骨器(図版23-a、第20図)須恵器長頸壺である。上半部は欠失している。

残存高は17.8cm、胴部最大径16.4cm、底径9.3cmを測る。内面底部には灰が径3cmの範囲に円形に付着していることから、頸部の内径が推定できる。

肩部は丸く張る。胴外面下半部から底面にかけてはヘラケズリの後、ナデを施す。



第21図 C-6地点砂魚塚1号墳
南裾出土蔵骨器実測図(1/3)

図版

III. おわりに

市園、砂魚塚地区から火葬墓が各1基、立石地区では火葬土坑1基、火葬墓2基等が発見された。いずれも奈良時代の墓群である。

荻浦遺跡群内では、7世紀に築造され8世紀前半まで追葬が続けられた立石2号墳に続いて造墓されたと推定される。立石2号墳は、丘陵の法面中位に小型の横穴式石室を構築したもので、粗い石組みは横穴式石室の最終段階の様相を感じさせ火葬墓出現前夜の終末期古墳の姿といえる。

多久遺跡群の地点では、小石室に4個の蔵骨器を納めた火葬墓が出土した。蔵骨器は、8世紀前葉の初葬に続き、中葉までに追葬されたことが報告されている。まさに後期古墳の造営理念を継承しながら当該地域で新たに導入された初期火葬墓の姿といえよう。造墓の順番としては立石2号古墳に後続して営まれた火葬墓と考えられる。

B-21-a地点、及びC-6谷地点については、堅穴住居、総柱掘立柱建物、製鉄園運送構群が発見された。いずれも奈良時代を中心とするもので、鉄生産に関わった集落と考えられる。

多久遺跡群の1号火葬墓周辺では鉄の精錬滓が出土し、火葬墓と鉄生産集団との関連性が推測されたが、荻浦地区ではより具体的にその関係をうかがい知ることが可能である。残念ながら集落からの出土遺物については紙面の都合で報告を割愛したため、これら遺構群の性格とともに別稿で補足、検討したい。

また、B-21-b地点で検出した江戸時代の水田遺構群も、当該一帯で展開された新田開発の実態を知る上で興味深い資料である。水田遺構は調査地点の北西一帯まで広がりをみせており、小字に残る「新開」の地名とともに近世における新田開発の実態を確認できる貴重な事例である。



茨浦地区の航空写真 (1973年頃)



a. A-1地点全景 (真上から)



b. 火葬墓 (西から)



c. 同左 (真上から)



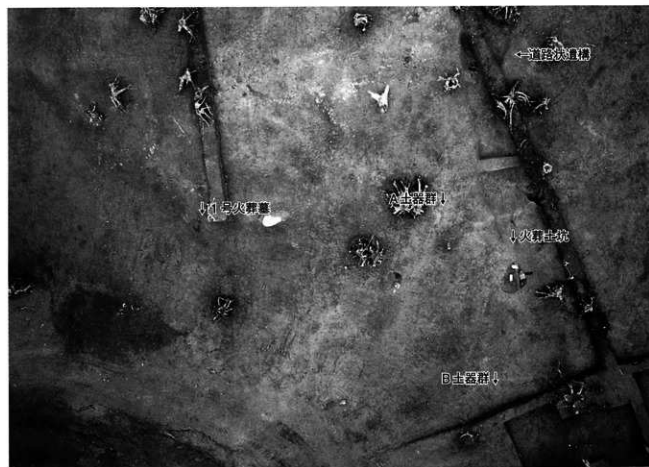
d. 火葬墓半截状況



e. 蔵骨器



a. A-3地点調査前全景(東から)



b. A-3地点火葬土坑、火葬墓等の配置(真上から)



a. 火葬土坑(北から)



b. 同左(西から)



c. 1号火葬墓



d. 2号火葬墓



e. 1号火葬墓蔵骨器



g. A土器群出土壺



f. 2号火葬墓蔵骨器



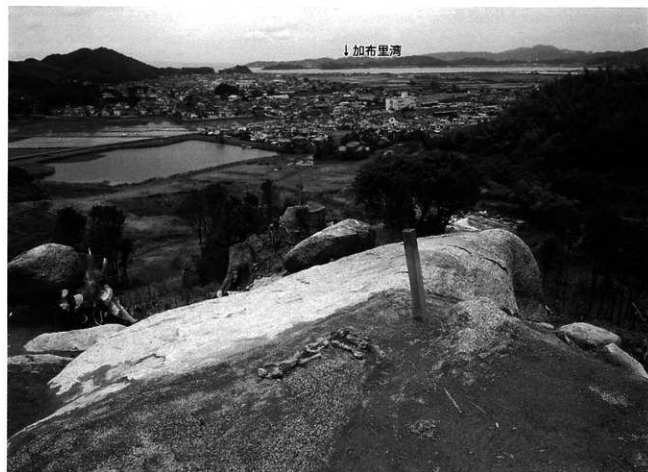
h. B土器群出土杯⑧



a. B-20 地点遠景 (西から)



b. 頂上部花崗岩露頭近景 (真上から)



c. 花崗岩上馬具出土状況と海岸線への眺望 (東から)



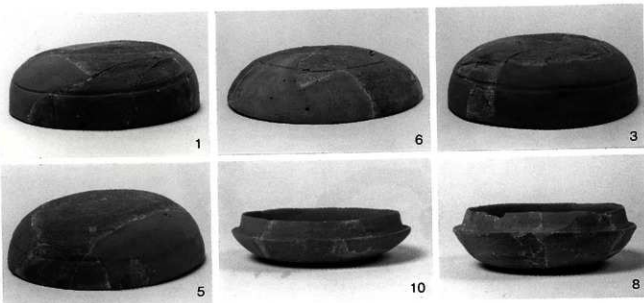
a. 馬具出土状況近景 (東から)



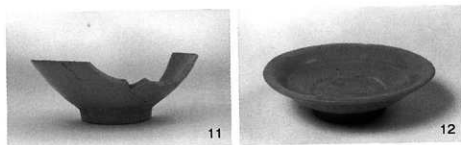
b. 馬具



a. 櫛目文鏡 (1/1)



b. 須恵器



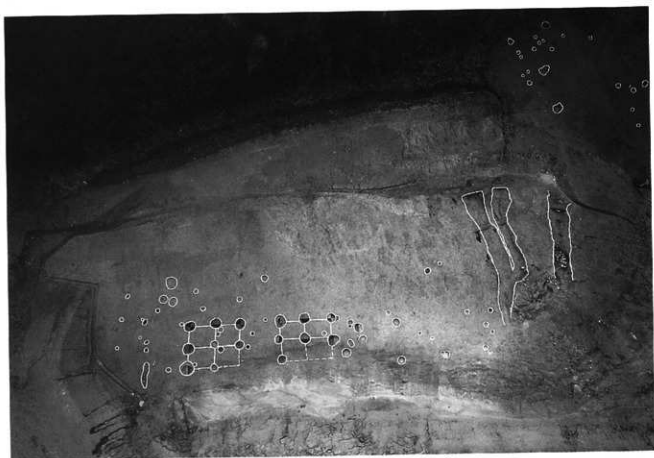
c. 白磁



a. B-21-a 地点全景 (北東から)



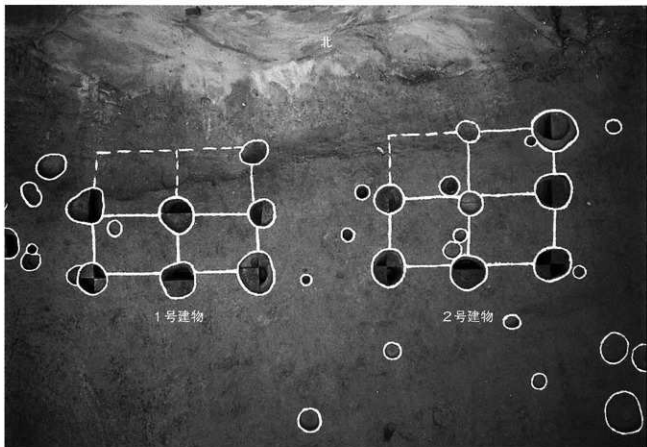
b. B-21-a 地点全景 (真上から)



a. B-21-a地点東区近景(上から)



b. B-21-a地点東区近景(北東から)



a. 掘立柱建物群(真上から)



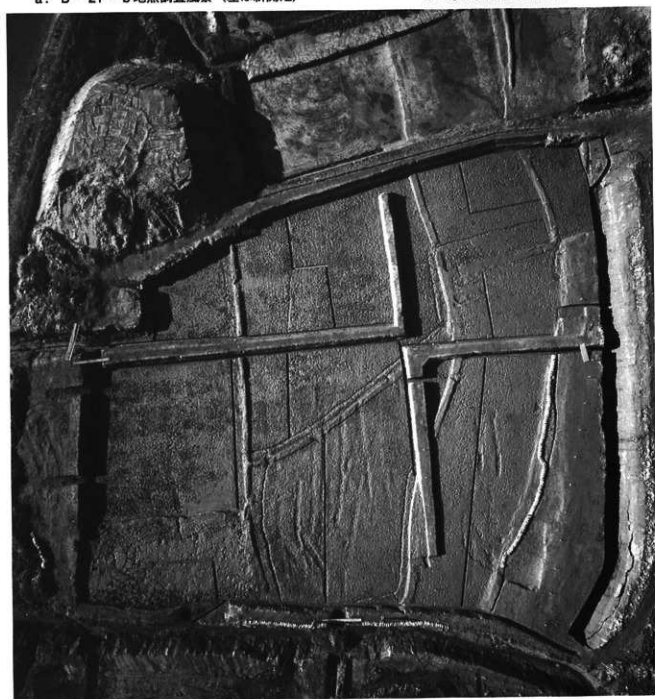
b. B-21-a地点西区近景(東から)



a. B-21-b 地点調査風景 (左は新開池)



b. 水田面堆積砂層断面



c. B-21-b 地点近世水田全景 (真上から)



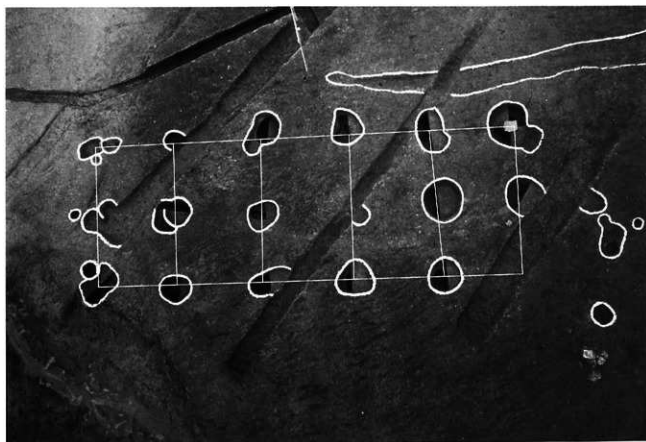
C-6-谷地点全景 (西から)



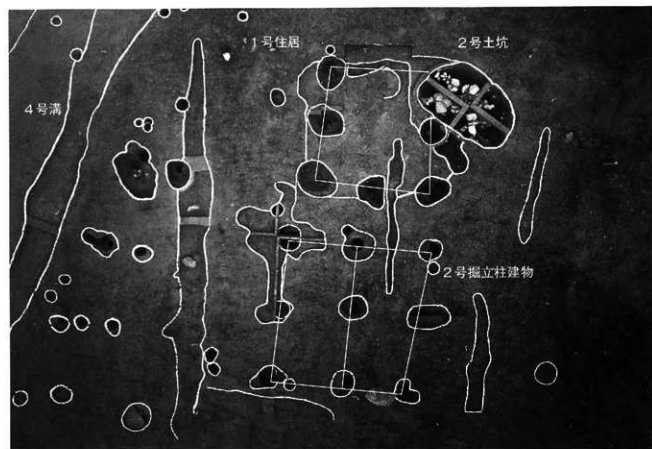
C-6-谷地点全景 (真上から)



a. 奈良時代建物群 (真上から)



b. 1号建物 (真上から)



a. 2号建物, 1号住居, 2号土坑 (真上から)



b. 2号住居, 3号住居 (真上から)



a. 4号住居のカマド



b. 土坑群と1号溝 (真上から)



a. 1号土坑



b. 2号土坑



c. 3号土坑



d. 6号土坑



e. 7号土坑



f. 8号土坑



a. 9号土坑



b. 10号土坑



c. 11号土坑横出状况 (北から)



d. 11号土坑土层断面 (南から)



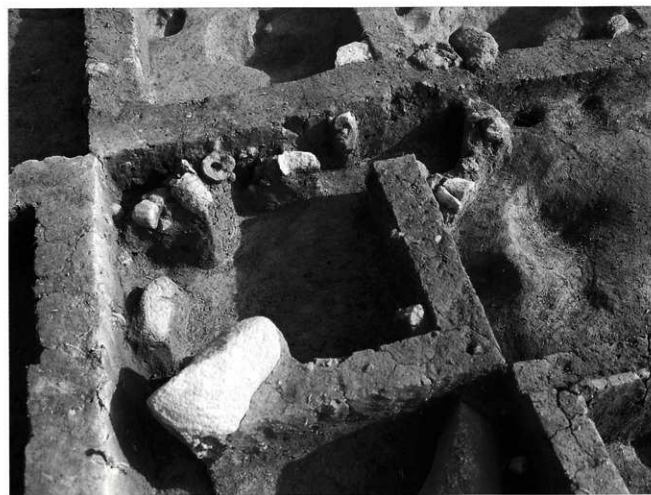
e. 11号土坑完掘状况 (南から)



f. 砂魚塚1号墳南掘焼土坑 (南から)



a. 12号土坑



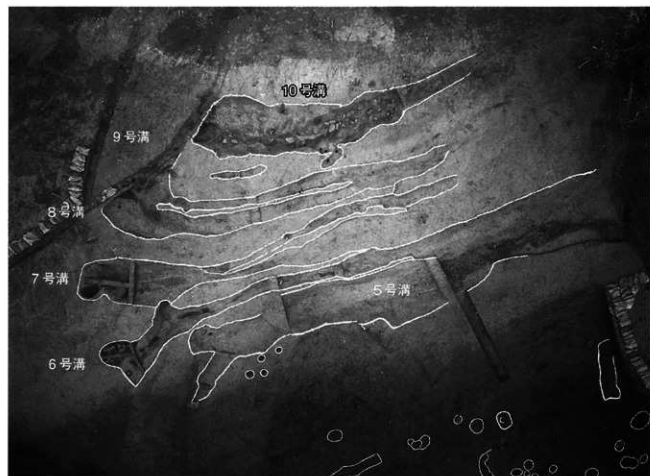
b. 12号土坑遺物出土状況(北から)



a. 12号土坑完掘状況



a. 12号土坑内溝状遺構



a. 溝群 (真上から)



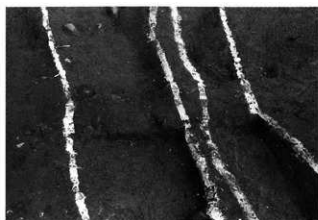
b. 5号溝土層断面



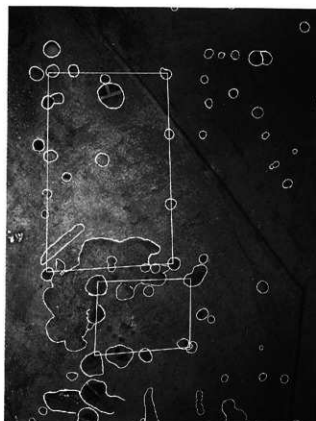
c. 6号溝土層断面



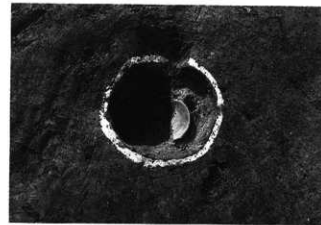
d. 7号溝土層断面



e. 8, 9号溝土層断面



a. 5号住居と3号建物 (真上から)



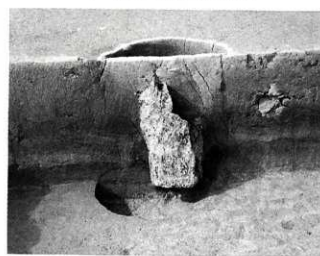
b. 柱穴53土師皿出土状況



c. 柱穴57土師皿出土状況



d. 大柱穴検出状況



e. 大柱穴半截状況



a. C-6 地点砂魚塚 1号墳南裾出土蔵骨器



b. A-1 地点市園遺跡出土石斧

報告書抄録

ふりがな	おぎのうら							
書名	萩浦							
副書名	集落・祭祀・生産遺構編							
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第100集							
編著者名	岡部裕俊							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	〒819-1192 福岡県前原市前原西一丁目1番1号 TEL 092-323-1111							
発行年月日	西暦2008年9月30日							
保管場所	〔写真〕〔遺物〕〔図版〕		伊都国歴史博物館					
保管場所所在地	〒819-1582 福岡県前原市大字井原916番地 TEL 092-322-7083							
所収遺跡名 ふりがな	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おぎのうら いせきくん いちぞの たていし さかのした はぜづかち く	福岡県前原市 大字大浦字市園 大字萩浦字立石 坂の下 砂魚塚	402222		33° 35' 32' ~ 54'	130° 33' 16' ~ 46'	1991年10月 17日~1993 年9月30日	約 80,000㎡	萩浦7地区 圃整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
萩浦遺跡群 市園 立石 坂の下 砂魚塚地区	集落 火葬墓 祭祀 製鉄遺構 水田跡 等	縄文時代 ~室町時 代	火葬墓 火葬土坑 掘立柱建物 竪穴住居 溝 土坑 柱穴 等	石器 弥生土器 土師器 須恵器 銅鏡 馬具 鉄滓 青磁 白磁 等		丘陵上には奈良時代の火葬墓5基が点在。馬具、須恵器、徳日文鏡の出土地点では古墳時代の祭祀を想定。谷間では古墳~室町時代の集落、製鉄遺構などを発見。多久川沿いの西側低地では、江戸時代の水田跡を確認。		

萩 浦

集落・祭祀・生産遺構編
前原市文化財調査報告書 第100集
2008年9月30日

発行 前原市教育委員会
前原市前原西一丁目1番1号

印刷 物システム・レコ
福岡市東区土井一丁目11番7号